

様式4

令和元年度 日立市教育研究会先進校等調査派遣研修報告書

日立市立日高等学校 教諭 橋本 郷史

- 1 派遣期日 令和元年 11月 9日(土)
- 2 研修先 学校名(会場名) 筑波大学附属中学校
所在地 東京都文京区大塚1-9-1

3 研修内容

(1) 視察校における研究への取り組み

研究主題：「新学習指導要領の施行を見据えた授業実践」

筑波大学附属中学校国語科では、「主体的・対話的で深い学び」が国語教育に於ける普遍的な課題であると考え、平成27年度～29年度の3カ年にわたり、「学習者の主体性を考える」を主題として実践的研究を積み重ねてきた。その成果の上に立ち、平成30年度から「新学習指導要領の施行を見据えた授業実践」を研究主題として、継続的な研究を行っている。昨年度までの研究成果は以下の通りである。

① 第1学年

「古典を学ぶ意義を語る」を主題として「伝統的言語文化の現代的な意義を探ろう」という学習単元の授業公開を行った。指導者が19種類の教材を用意して、冊子資料とする工夫があった。数多くの教材を提示することによって、学習者の主体性に応じた選択の自由が保障された授業となった。「意義を語る」学習活動では、主体的な学びを伴うことで学習者が学ぶ楽しさを味わうことができた。一方で、選択の自由によって偏りが生じたという課題も見られたと報告された。

② 第2学年

教科書教材「夏の葬列」を教材に、「違和感を手掛かりに文学作品を読む」という単元主題について研究を行った。「違和感」を糸口に自分なりの問いを立て、グループ活動を通じて、自分の問いの解決を図ろうとし、学習者同士の対話・討議によって読みが深まることを意図して、指導者が後景に退くような授業となった。しかしながら、指導者の助言が少ないことによる学習の難しさを訴える声があり、課題が残ると報告された。

③ 第3学年

教科書教材「私」を教材に、「問いを重ねて読む」という単元課題について研究を行った。第2学年の研究と同様、学習者個人が自らの問いを立てることが学習の出発点となっているが、同時に「作者が作品に込めた問い」を想定して、それを自らの「問いと重ねる」過程を経ることに工夫を凝らした。更には、学習者同士の問いを交流する学習活動によって「自他の問いを重ねる」ことも意識されていた。こうした過程が、「深い学び」にどのように結びついたのかについては更に検討の余地があることが報告された。

このように、授業実践の報告を踏まえ、新たな教材の開発や指導手法の開拓を目指すことで、個の学びと協働での学びとの有効な結びつきなどに、新たな知見を得るべく本年度の授業実践に取り組んでいる。更に、様々な教科同士を関連させ、学校の授業全体で「探究的な学び」を意識しながら学習に向かう雰囲気構築することで生徒自身が自ら問題を解決していこうという姿勢を身につけることができている。

(2) 視察校の実践授業の実際

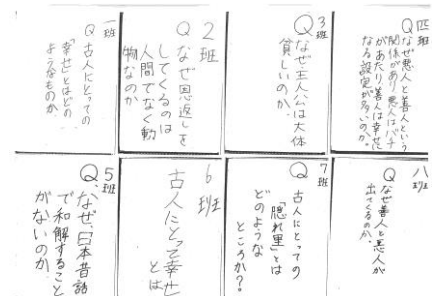
第1学年 国語科 単元名 比べて見つける「古人の見方・考え方」

～昔話に見る「日本」～

古典学習入門期にある中学1年生の学習者に、「古人の見方・考え方」について調べたり、想像を膨らませたりすることの魅力を実感させ、古典を学習する意義に気づかせることを主たる目的としている単元である。前時に『日本昔話』に見られる「あるある（よくある設定や展開）」をもとに、「古人の見方・考え方」に迫ることができそうな問いを個々で複数考え、班内で共有し、これから追究してみたい問いを三つにしぼっている。本時は、この三つの問いについて班の中で答えを予想しながら、一つにしぼり、発表するという授業であった。授業の流れは以下の通りである。

まず、前時までの学習を振り返りながら、「三つの問いを吟味し、今後班で追究する問いを決定する」という学習の見通しをもたせた。前時のワークシートと生徒が授業中にメモを取っていた記録ノートを使って学習内容を振り返ることができるようにしていた。

授業形態はグループ活動（4人編成）で進められた。各グループで課題に対する協議を行う前に、参考となるように学級全体の場でいくつかの問いについて答えを検討する場を設け、問いの選定の際に大切にしたい要点を確認できるようにされていた。特に、次時の授業につながるように、「『古人の見方・考え方』について追究できそうな問い」「答えが出た時点で、新たな問いが生まれそうな問い」の



二点を、問いの精選の軸とすることを確認していた。グループ活動の際に生徒が自ら考え出したテーマは、各グループの生徒がそれぞれもっている知識をもとにし、今後授業でこの問題について調べ、考察を進めていくため、活発な意見交換が行われていた。自らの考えをまとめていく。授業の終末では、ホワイトボードを用いて、各班の考察についての途中経過の発表を行った。発表の形式などについても決まったものとしているわけではなく、生徒自身が内容を他の班の生徒に伝えることができるように工夫して発表していた。

授業全体を見ても、授業者からの指示は最低限（授業の流れの説明や考えを深めるような机間指導による問いかけ）のみとし、学習者が自ら考え、問いの解決や学習に向かう授業の雰囲気を作成されていた。

4 感想

(1) 探究的な学習に基づく高い学習意欲

授業を参観して、全生徒の学習態度から主体的に学習しようという姿勢が見られることに感銘を受けた。元よりこの学校の生徒の学習意欲が高いことだけではなく、他教科との連携を含めて学校全体で「探究的な学習」という意識をもって学習に臨む雰囲気を作り上げていると感じた。

(2) 継続した学習の大切さ

1時間や1単元、1年間だけではなく継続して学習を行うことが国語科の力を身につける上で必要なことであると改めて感じた。また、筑波大付属中学校で実践していた学習記録ノートや生徒個人が学習テーマを設定した研究についても継続することで生徒自身が課題を解決する力を高めることができている要因であると感じた。

(3) 変容のある授業設定による学びの楽しさ

授業の中で、生徒自身が自らの変容を感じることができる瞬間がある授業を作り上げていくことが生徒自身が成長を感じ、学ぶことの楽しさ、意義を感じるきっかけとなっていると感じた。